

自由来室活動を行うあるスクールカウンセラーに対する中学生の捉え方

茨城県スクールカウンセラー 半田 一郎

千葉県スクールカウンセラー 有賀 直美

相談室を開放し、多くの生徒と日常的な関わりを持っていたスクールカウンセラーについて、中学生199名を対象として質問紙調査を行った。中学生がスクールカウンセラーに対して持つイメージは、因子分析の結果から「家庭的イメージ」「社会的イメージ」「静的イメージ」の3因子が抽出された。また、スクールカウンセラーと話をしたことが多いほど、家庭的、社会的イメージが強く、さらに、スクールカウンセラーへのニーズが高いことが分かった。

キーワード：スクールカウンセラー、中学校、イメージ、援助ニーズ、専門的ヘルパー

問 題

平成7年度より、文部省によるスクールカウンセラー活用調査研究委託事業が始まり、平成12年度末で、調査研究の期間を終えた。平成13年度以降、スクールカウンセラー（以下SCと略）を全中学校に徐々に配置しようとの計画が進んでいる。

活用調査研究委託事業では、SCは生徒への直接的な援助を行うよりも、教職員とのコンサルテーションに重点を置き活動してきた（例えば、半田（2000a））。このことに関して、藤岡（1999）では、「日本独自のスクールカウンセリング活動として教師サポート中心型が望ましいのではないかと考えている」と述べられている。

また、一方では、開かれた相談室運営を行い、多くの生徒と直接的な関わりを持ち、その中で心理的な援助を行おうという試みも行われている。例えば、木南（1998）では、「遊び部屋」と呼ばれる部屋を休み時間に開放し、そこで生じる生徒の様々な相互作用にSCが援助的に関わっていった実践が報告されている。また、半田（1996, 2000b）では、休み時間等に生徒が相談室を自由に訪れ自由に過ごす活動を「自由来室活動」と名付け、そこでのSCの関わりが、援助的な効果を持っていることを明らかにしている。

また、石隈（1996）は、「いざとなったら、相談に行きたい相手であるか」という視点でSCが子どもからテストされ、このテストにいつも合格するとは限ら

ないと指摘している。つまり、自由来室活動を行うことは、SCが生徒から、日常の場の中で常にテストされていることを意味する。

一方、近藤（1995）では、治療や相談における関係性や構造という視点からSCの活動について考察している。そこでは、「カウンセラーが働く場と子どもの現実生活の場との間に存在した一定の距離、それによって保証されていたカウンセラーの匿名性や中立性や非個人性、あるいはクライアントとカウンセラーが出会う面接室という場の虚構性が、喪われ、脅かされ、壊されるという重大な変化が生まれ、これに応じてわれわれ自身が抛って立つ基本的なスタンスの変換や見直しが迫られるのである。」と問題点が指摘されている。

つまり、自由来室活動などによって日常的な場面の中で生徒との関わりを持つことは、SCに対して、基本的なスタンスの変換や見直しが要求されるものであると言えよう。また、このことは、半田（2000b）においても「（自由来室活動は）心理臨床における新たな試みと位置づけることができる」と指摘されている。

一方、学校心理学の枠組みでは、SCは、心理教育的援助サービスを専門に行う専門的ヘルパーであると位置づけられる。そして、心理教育的援助サービスにおいては、子ども自身によるヘルパーの活用が今後の課題の1つであり、子どもが援助をどう捉えているかを知ることが重要であると指摘されている（石隈, 1999）。

こういったいくつかの視点から、自由来室活動のような学校の日常的な場で生徒との関わりを持つSCにとっては、SCに対する生徒の受け止めかたが非常に重要であると言える。

目 的

本研究では、自由来室活動をスクールカウンセリングの実践に取り入れていたあるSCを、どのように生徒が受け止めているかを、調査研究することを目的とした。生徒とSCの関わりの度合いやSCへのニーズの強さと、SCへのイメージの関連を明らかにしたい。そして、日常性を重視するSCの活動が、生徒とSCの関係にどのような影響を及ぼしているかを明らかにしたい。

方 法

1. 調査対象と手続き

調査対象は、関東地方の市立中学校1校の各学年2クラスずつの生徒199名であった。内訳は1年生69名、2年生66名、3年生64名、また、男子91名、女子108名であった。なお調査対象となった中学校の規模は、各学年5クラスずつの計15クラスであった。

調査時期は、2000年の3月であった。

調査対象となった中学校には、1995年4月より、自治体独自の事業による専門職のSC1名が週に3日、1日8時間の割合で勤務していた。なお、調査時期までの5年間は同一のSCが勤務していた。また、SCは大学院で心理学を修めた20代後半の女性であった。

SCは、生徒の日常生活の中での関わりを重視して活動していた。狭義のカウンセリングにとどまらず、開かれた相談室運営を行い、休み時間や放課後には雑談室を生徒に開放し誰でも訪れて良いとする活動(自由来室活動)を行っていた。来室する生徒数は、1日に平均30名程度であり、生徒は、SCや他の生徒と相談をしたり、くつろいだりと思いいいに過ごしていた。生徒にとっては、相談室が落ち着けるような居場所となったり、対人関係を学べる場所として機能していた。一方、SCは生徒とただ雑談をするだけでなく、カウンセリングのアプローチを応用し、会話のポイントポイントで、生徒の認知や感情に対して働きかけを行

うように工夫していた。また、生徒との相談は生徒からの申し込みに応じて予約を設定し、主として放課後に時間を確保して行っていた。予約相談のみに応じる日時や、予約なしの飛び込み相談のみに応じる日時を設定し広報を行い、生徒の相談に応えるように工夫していた。相談件数は、1日に1~2件であり、その大半が学校生活上の対人関係の問題であった。そして、1~2ヶ月に1回程度の頻度で生徒対象の印刷物(相談室便り)を独自に作成し発行していた。内容は相談室の開室予定日や様子、来室者数の報告、精神衛生に関するトピックの紹介などであった。これらの活動は、半田(1996, 2000b)に報告されているものと共通するものであった。

調査方法は、質問紙を学級活動の時間などに配布し、その時間内で記入し回収するという形式で行われた。また、調査は無記名で行われた。

2. 調査内容

調査内容は以下の通りであった。フェイスシート：学年、性別を記入。SCについてのイメージを聞く項目。櫻井・有田(1994)木幡・庄司(1995)をもとに、「楽しい-つまらない」など39の形容詞対を作成したもの。「非常に、かなり、やや、どちらでもない・分からない、やや、かなり、非常に」の7段階で評定させた。質問紙では、肯定的な表現または否定的な表現が、左右のどちらかに偏らないように配置した。分析の際には、「どちらでもない・分からない」を「0」と数値化し、左側の形容詞の程度が高くなるにしたがい「1, 2, 3」、右側の形容詞の程度が高くなるにしたがい「-1, -2, -3」と数値化した。

SCや相談室との関わりを聞く項目。「SCと話した頻度」「相談室来室回数」「相談室来室理由」「相談室便りを読んだ程度」の4種類の内容について調査した。実際の項目はそれぞれ以下のものであった。「カウンセラーと話をしたことがありますか?」(よく話す、時々話す、あまり話さない、全く話さない、から1つ選択)。「あなたは相談室に来たことがありますか?」(10回以上ある、6~9回くらい、2~5回くらい、1回だけ、ない、から1つ選択)。「相談室へは何をしに来ましたか?」(おしゃべり、息抜き、カウンセラーに相談、何となく、ひまつぶし、友達が行くから、その他、から複数選択)。「相談室便りは読んだことが

ありますか?」(きちんと読んだ, いちおう読んだ, あまり読んでいない, 全く読んでいない, から1つ選択)。「SCへのニーズを聞く項目。「SCとの相談へのニーズ」「SCと話すことへのニーズ」の2種類について調査した。実際の項目は以下の通りであった。「もし相談事ができたらカウンセラーに相談したいと思えますか?」(ぜひ相談したい, 少しは相談したい, あまり相談したくない, 絶対相談したくない, から1つ選択)。「特に相談がなくともカウンセラーと話してみたいと思えますか?」(ぜひ話したい, 少しは話したい, あまり話したくない, 絶対話したくない, から1つ選択)。

SCや相談室との関わりやSCへのニーズについて聞いた項目では, 分析の際に, 程度・頻度の低いものから「0, 1, 2, 3, 4」と数値化した。

なお, 市独自の事業であるため, SCには「カウンセラー」という独自の名称が付けられていた。そのため, 質問紙の中では「スクールカウンセラー」という言葉を用いず, 「あなたの学校のカウンセラー」という表現を使い, 誤解や混乱を避けるようにした。

結果と考察

1. SCや相談室と生徒の関わり

SCとの話した頻度, 相談室への来室回数は, 表1, 2の通りであった。相談室を訪れたり, SCと話すするなど, SCと直接の関わりが1度でもある生徒は, 70%程度であり, SCの存在が学校生活の中に浸透してきている様子がうかがわれる。自治体独自の事業によるSCのため, 勤務時間が週に3日, 1日あたり8時間と, 比較的長時間の勤務であったこと, 相談室を解放して自由来室活動を行っていたことが要因となつて, 多くの生徒との関わりが持てたと考えられる。

学校心理学では全ての児童生徒を援助サービスの対

表1 スクールカウンセラーと話した頻度

	人数	%
よく話す	15	7.5
少し話す	54	27.1
あまり話さない	59	29.6
全く話さない	71	35.7

表2 相談室への来室回数

	人数	%
10回以上	29	14.6
6~9回くらい	21	10.6
2~5回くらい	57	28.6
1回だけ	38	19.1
ない	54	27.1

象であると考え, 援助サービスをニーズの大きさや対象の広さから, 一次的, 二次的, 三次的援助サービスの三種類に分類している(石隈1999)。多くの生徒がSCとの関わりを持ち, 相談室を訪れているということは, ごく一部の特定の生徒だけではなく, 多くの生徒のもつニーズにSCが関わっていくこと(一次的・二次的援助サービス)の基盤になると言える。

相談室への来室理由では, 表3の通りであった。「相談」という理由での来室は, 10%を若干超える程度で, 最も少なくなった。「ひまつぶし」や「息抜き」, 「おしゃべり」といった, 漠然とした理由の来室が多くなった。生徒の学校生活の中で生じる幅広いニーズに, SCや相談室が応えていることが伺われる。実際に来室した生徒の様子をSCから見ると, 多くの生徒は, 生徒同士でおしゃべりをするために来室しているようであった。また, 一人で来室し所在げにうろうろする, ソファーに腰掛けSCに対して「元気?」と問いかける, 「ちょっと顔を見に来ただけ」と立ち寄りなど一見何のために来室したか分からない生徒も多かった。「息抜き」「何となく」といった理由での来室にあたると思われる。

表3 相談室への来室理由

	人数	%
おしゃべり	52	26.1
息抜き	63	31.7
相談	23	11.6
何となく	54	27.1
ひまつぶし	64	32.2
友達がいく	49	24.6
その他	33	16.6

(複数回答)

また, 来室理由の選択数は, 表4のとおりであった。来室理由が選択されていない生徒は33人(16.6%)で

あり、80%を超える生徒が何らかの理由で相談室へ来室したと言える。SCが学校に配置されている時間が長いこともこのことの一つの要因となっていると考えられる。

表4 相談室への来室理由の選択数

選択数	人数	%
0	33	16.6
1	86	43.2
2	32	16.1
3	21	10.6
4	16	8.0
5	7	3.5
6	2	1.0
7	2	1.0

石隈(1999)では、相談室や保健室が居場所となり、子どもがおしゃべりをしたりすることを二次的援助サービスの例として挙げている。今回の調査対象となった学校のSCの実践でも、SCは生徒への二次的援助サービスを提供していたと言える。

相談室便りを読んだ程度は、表5の通りであった。60%を超える生徒が、一応は相談室便りを読んでいるという結果であった。相談室やSCについての広報・宣伝だけではなく、対人関係スキルなどについての啓発といった一次的援助サービスの媒体として、有効性が期待できる。

表5 相談室便りを読んだ程度

	人数	%
きちんと読んだ	35	17.6
いちおう読んだ	96	48.2
あまり読んでいない	41	20.6
全く読んでいない	27	13.6

2. SCへのニーズ

SCとの相談へのニーズは、表6の通りであった。「少しは相談したい」「ぜひ相談したい」を併せると、60%を超える生徒がSCとの相談へのニーズを抱いていると言える。実際に相談に訪れた生徒は、23名(11.6%)であり、それに比べて、遙かに多い生徒が、

相談へのニーズを持っていると言える。

表6 スクールカウンセラーとの相談へのニーズ

	人数	%
ぜひ相談したい	29	14.6
少しは相談したい	95	47.7
あまり相談したくない	56	28.1
絶対相談したくない	19	9.5

SCと話すことへのニーズは、表7の通りであった。相談へのニーズに比べて、低くなっている。自由来室活動では、多くの生徒は、何人かの生徒同士でおしゃべりや雑談を楽しんでいた。SCは、1対1で生徒とおしゃべりをするのは少なく、生徒同士のおしゃべりをそばで聞きながら、感情表現を促したり、話を要約したりといった形で、カウンセリング技法を応用して介入することが多かった。生徒の多くは、自由来室活動の際はSCも交えた友達同士のおしゃべりの場であるという感覚を持ち、SCとじっくり話をする場であるという感覚は持っていないのではないかと想像される。そのため、SCと話すことへのニーズはやや低くなったのではないかと考えられる。

表7 スクールカウンセラーと話すことへのニーズ

	人数	%
ぜひ話したい	32	11.6
少しは話したい	94	25.1
あまり話したくない	50	47.2
絶対話したくない	23	16.1

3. SCのイメージについての因子分析

39項目の形容詞対について、主因子法により因子分析を行った。固有値が1以上となる因子は第3因子までであった。因子数を3で分析しバリマックス回転を施し、各因子への負荷量を求めた。その結果、1つの因子のみに.40以上の負荷量を持つ23項目を採用し分析の対象とした。

得られた23項目について、主因子法により因子分析を行った。その際、負荷量がマイナスにならないように形容詞対を反転させ向きをそろえた。固有値が1以上となる因子は第3因子までであったため、3因子を

表8 スクールカウンセラーに対するイメージの因子分析結果

項	目	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
なごやかな	とげとげしい	.80	.20	.15	.70
ていねいな	乱暴な	.68	.25	.30	.62
のんびりした	せっかちな	.65	.11	.23	.49
おだやかな	激しい	.64	.22	.19	.50
開かれた	閉じられた	.63	.21	.18	.48
きれいな	不潔	.61	.35	.14	.52
女性的な	男性的な	.56	-.11	-.04	.32
気楽な	しんこくな	.54	.32	-.05	.40
気の長い	短気な	.53	.30	.33	.48
ほっとする	きんちょうする	.46	.28	-.10	.31
楽しい	つまらない	.27	.81	.19	.77
明るい	暗い	.17	.78	-.02	.64
好き	きらい	.28	.73	.24	.67
心がはずむ	ゆううつな	.38	.70	.10	.65
人気のある	人気のない	.31	.69	.02	.57
たいせつな	どうでもいい	.39	.66	.18	.62
はでな	地味な	-.20	.59	-.17	.35
おしゃべり	無口な	.26	.53	.00	.33
めだつ	めだたない	.15	.52	-.20	.41
しずか	そうぞうしい	.18	-.03	.73	.56
おとなしい	活発な	-.01	-.26	.66	.51
落ちついた	落ちつきのない	.35	.17	.66	.59
まじめな	ふまじめな	.39	.27	.48	.46
二乗和		8.83	8.13	3.57	
寄与率(%)		22.6%	20.8%	9.2%	
累積寄与率(%)		22.6%	43.5%	52.6%	

抽出しバリマックス回転を施した。累積寄与率は52.6%となった(表8)。

第1因子は、「なごやかな - とげとげしい」「ていねいな - 乱暴な」「女性的な - 男性的な」「気楽な - しんこくな」等の形容詞対から構成されていた。形容詞対の左側の言葉からは、家庭に対する肯定的なイメージが連想されることから、この因子を「家庭的イメージ」因子と命名した。第1因子を構成する項目のCronbachの係数は.88であった。さらに因子を構成する項目の得点の平均を算出し、「家庭的イメージ得点」として分析に使用した。得点の幅は、-3~3点であり、肯定的イメージ得点が高いほど、SCに対して「なごやか」「ていねい」等の家庭的イメージが強いことを示している。

第2因子は、「楽しい - つまらない」「心がはずむ - ゆうつな」「人気のある - 人気のない」「はでな - 地味な」等の形容詞対から構成されていた。形容詞対の左側の言葉は、他者との関わりに関する肯定的なイメージと捉えられることから、第2因子は「社会的イメージ因子」と命名した。第2因子を構成する項目のCronbachの係数は.90であった。さらに因子を構成する項目の得点の平均を算出し、「社会的イメージ得点」として分析に使用した。得点の幅は、-3~3点であり、社会的イメージ得点が高いほど、SCに対して「楽しい」「心がはずむ」等の社会的イメージが強いことを示している。

第3因子は、「しずか - そうぞうしい」「おとなしい - 活発な」「落ちついた - 落ちつきのない」等の形

容詞対から構成されていたため、「静的イメージ因子」と命名した。第3因子を構成する項目のCronbachの係数は.76であった。さらに因子を構成する項目の得点の平均を算出し、「静的イメージ得点」として分析に使用した。得点の幅は、-3～3点であり、静的イメージ得点が高いほど、SCに対して「しずか」「おとなしい」等の静的イメージが強いことを示している。

因子分析の結果より、中学生はこのSCのイメージを「家庭的イメージ」「社会的イメージ」「静的イメージ」の3種類の視点から捉えていると言える。

生徒が相談室を出入りする際に、「ただいま」「行って来ます」などとSCに挨拶してくることもよくあり、SCは「お帰りなさい」「行ってらっしゃい」と応えるようにしていた。この点からも、SCに対する「家庭的イメージ」という視点が生徒の中にあると考えられる。

また、SCは1対1のカウンセリングというスタイルだけではなく、自由来室活動における複数の生徒とおしゃべりを重視していた。そして、その中でカウ

ンセリングの技法を応用して生徒に働きかけを行おうとしていた。そのため、SCにとっては複数生徒とおしゃべりは、非常に重要な援助活動の場であった。生徒からSCを見た場合には、こういったことが「社会的イメージ」という視点につながったのではないかと考えられる。

4. SCや相談室との関わりとSCに対するイメージおよび、SCへのニーズの関連

SCとの関わりについて聞く項目は、過去の体験を聞く項目であった。また、SCについてのイメージを聞く項目は、現在感じているSCへのイメージであった。そして、SCへのニーズは、「もし相談事ができたら...」「特に相談がなくても...」という仮定に基づくニーズであった。従って、この3者の関係は、図1のようなモデルに従って捉えることができる。そこで、重回帰分析を使用したパス解析を行いモデルの検証を行った。その結果、得られた標準偏回帰係数は表9のとおりであった。パスは、図2のとおりであった。

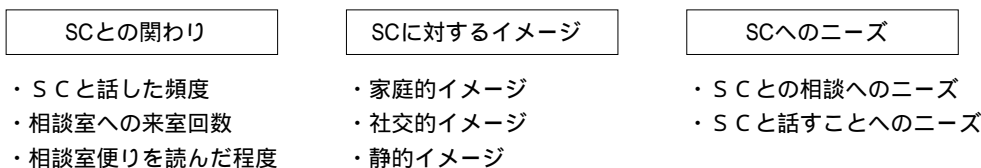


図1 SCと生徒との関係のモデル

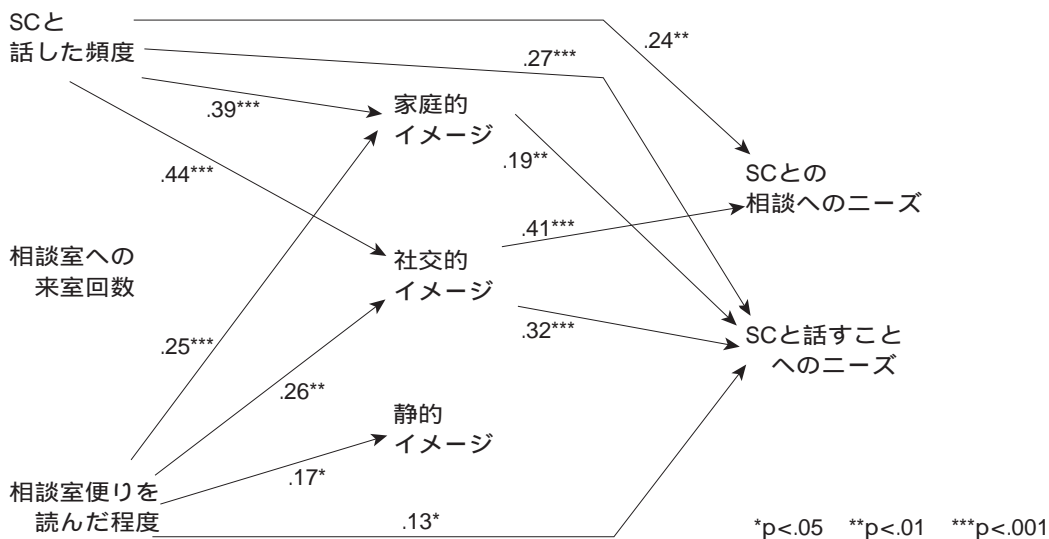


図2 パス解析図

表9 重回帰分析結果

説明変数	基準変数	家庭的 イメージ	社会的 イメージ	静的 イメージ	SCとの相談 へのニーズ	SCと話すこと へのニーズ
SCと話した頻度		.39***	.44***	.13	.24**	.27***
相談室への来室回数		-.14	-.07	-.04	-.05	-.02
相談室便りを読んだ程度		.25***	.26***	.17*	.11	.13*
家庭的イメージ					.10	.19**
社会的イメージ					.41***	.32***
静的イメージ					-.04	.01
R		.48***	.57***	.24**	.66***	.72***
adj.R ²		.22	.31	.04	.42	.51

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

(1) SCとの関わりについて

SCと話した頻度は、「静的イメージ」以外の全ての変数に対して、有意な正のパスが得られた。SCとよく話をするほど、SCに対する「家庭的イメージ」「社会的イメージ」「SCとの相談へのニーズ」「SCと話すことへのニーズ」が高くなると言える。

一方、相談室への来室回数からは、有意なパスが得られなかった。

また、相談室便りを読んだ程度は、SCとの相談へのニーズ以外の全ての変数に対して、有意な正のパスが得られた。相談室便りをよく読むほど、「家庭的イメージ」「社会的イメージ」「静的イメージ」「SCと話すことへのニーズ」が高くなると言える。

これらから、生徒が相談室に訪れただけでは、SCに対するイメージが変化したり、SCへのニーズが高まったりすることは期待できず、SCが生徒と直接に話をするのが重要であると指摘できる。実際にも、調査対象となったSCは生徒から「ちょっと見かけたときは変なやつかと思ってたけど、話してみたらなんかいい人って感じだよね」「おしゃべりしたら、なんかおもしろい人だってわかった」という感想を聞くこともあった。また反対に、ある生徒が相談室を訪れたが、SCは他の生徒との対応に追われ、その生徒とは話もできないことも時々あった。そして、そのうちにその生徒は来室しなくなってしまうといったことも日々の活動の中でどうしても生じがちであった。半田(2001)では、自由来室活動の中で、ある生徒がSCに突っかかってきている最中に来室した生徒に対して、言葉ではなく表情で応えた様子が報告されている。ま

た、木南(1998)でも、遊び部屋での活動について「歓迎の言葉を声に出して伝えられないときにも、“今、私にはあなたのことが目に入っていますよ”というサインを何らかの形で送ることを考えてみる。」と述べられている。これらのように、来室した生徒との何らかの関わりが持てるように、SCの側から工夫することが非常に重要だと言える。

また、相談室便りも、ある程度の有効性を持っていることが分かった。本研究の対象となったSCは、相談室便りには、生徒の描いたイラストを使用したり、生徒の興味をひくように工夫していた。しかし、生徒からは、使用したイラストの作者などについて尋ねられることはあっても、内容に関して感想や意見が聞かれることはほとんどなかった。そのためもあって、その有効性や必要性に対してはSCは自信を十分には持っていなかった。しかし、今回の結果からは、SCの目には見えないところでSCに対するイメージの変化やニーズの変化に影響していることが分かった。相談室便りを発行するだけではなく、興味をひき、見やすい紙面作りが実践上は重要であると言えよう。

(2) SCへのイメージについて

「家庭的イメージ」からは、「SCと話すことへのニーズ」に対してのみ有意な正のパスが得られた。「家庭的イメージ」が高いほど、「SCと話すことへのニーズ」が高くなると言える。

SCへの「家庭的イメージ」が高いことは、「なごやかな」「のんびりした」「ほっとする」などの心身のリラックスを促すようなイメージを強く持つことである

と言える。こういったイメージをSCに感じることは、SCに相談し悩みや問題に取り組むよりは、それらを一いつたん脇に置き、SCのそばで心身の回復を求めているということかもしれない。そのため、「家庭的イメージ」は、「SCと話すことへのニーズ」には関連があり、「SCとの相談へのニーズ」には関連が得られなかったのかもしれない。

また、「社会的イメージ」からは、「SCとの相談へのニーズ」、「SCと話すことへのニーズ」の両者に有意な正のパスが得られた。「社会的イメージ」が高いほど、「SCとの相談へのニーズ」「SCと話すことへのニーズ」が高くなると言える。

「社会的イメージ」は他者とのかかわりに関する肯定的なイメージと言え、また、「SCと話した頻度」とも関連があった。これらから、「社会的イメージ」は、自由来室活動でのSCを交えたおしゃべりや雑談の楽しさと関連するイメージであると考えられる。そのため、SCに対して「社会的イメージ」を強く感じるものは、SCと話をしたいというニーズを強く持つと考えられる。一方、田島(1998)は、中学生の心性として、大人に正面切って相談にのってもらおうということが苦手であると指摘している。「社会的イメージ」と「SCとの相談へのニーズ」に正のパスが得られたことは、中学生が楽しいおしゃべりの延長としての相談を求めていることを示唆している。実際、相談を訪れる生徒の多くは、自由来室活動におしゃべりにやっていた生徒であった。また、自由来室活動の中で、SCと生徒がおしゃべりをしている途中で、生徒から何かを思い出したように「そういえば、先生、相談があるんだけど、今度時間とってよ。」などと、相談の予約を求めてくることもあった。

「静的イメージ」からは、有意なパスが得られなかった。また前述のように、「静的イメージ」には「相談室便りを読んだ程度」からのみ有意なパスが出た。その標準偏回帰係数は.17と低い値であった。このことから、「静的イメージ」は、SCとの関わりやニーズとあまり関連がないイメージだと考えられる。「静的イメージ」は、カウンセラーはおとなしい・物静かだ、などといった固定観念に関連するのかもしれない。

以上のように、生徒がSCに抱いているイメージが、生徒のSCへのニーズに影響を与えていることが示さ

れた。生徒からの自発的なSCへの関わりを促すには、特に「社会的イメージ」を高めることが重要であると言える。自由来室活動の中での生徒とのおしゃべりに、ユーモアの感覚をもって関わっていくことが重要だと言えよう。

まとめと今後の課題

本研究の対象となったSCは、相談室を生徒に開放して、自由来室活動を行っていた。このことが背景となり、結果に様々な影響を与えていたと考えられる。相談室で多くの生徒と関わりを持ち、そのことがSCに対する肯定的なイメージにつながり、さらに、SCに対するニーズにつながったと言える。つまり、自由来室活動によって、生徒とSCの間に肯定的な相互作用が生じていたと言える。

また、自由来室活動について、相談室が生徒のたまり場になるのではないかと心配が学校側から出されることがよくある。木南(1998)でも、「元気な生徒が居すわって本当に相談を必要としている弱い生徒が入って来にくくなるのではないのでしょうか」と学校から問われている。しかし実際は、誰でもが訪れる部屋であることが、「個人相談で来室する生徒を気楽にさせているようだ」という状況だったようである。本研究においては、SCへの相談のニーズが60%を超えていること、また、前述のように自由来室活動を通して、生徒とSCの間に肯定的な相互作用が生じていることをあわせて考えると、たまり場になって、かえって相談しにくくなるのではないかと心配は、本研究の場合はあまりあてはまらなかったと言えるだろう。一方、本研究の対象となったSCは、予約相談の時間や飛び込み相談の時間を設定していた。こういった工夫によって、相談のしやすさを多面的に保証することが大切であろう。

また、対象となったSCは、週に3日・1日8時間の割合で勤務していた。しかし現在のところ、文部省の活用調査研究によるSCと同じ勤務条件(週に8時間程度)でのSCがほとんどであろう。時間の制限が多い中でのSCの活動は、どうしても教職員へのコンサルテーション中心にならざるを得ない。しかし、学校心理学においては、SCは全ての児童生徒に対する心理教育的援助サービスの専門家として位置づけられ、

多くの機能や役割が期待されている。今回の研究結果からは、SCがより多くの時間を学校で活動することができれば、多くの生徒に対する一次的・二次的援助サービスを提供できる可能性を示唆したものであると言えるだろう。

本研究の結果は1名(1校)のSCに対するものであった。SC全体について一般化して考えるには限界が大きい。より多くのSCを対象として同様の研究を行い、結果の再現性を検討することも重要であろう。また、自由来室活動の機能や効果について論じるには、1人の生徒の動きや変容を追った事例研究も今後必要であろう。

引用文献

- 藤岡孝志 1999 教育臨床の今日的課題 - 日本独自のスクールカウンセリング活動の構築に向けて - 教育心理学年報, 38, 142-154 .
- 半田一郎 1996 公立中学校での学校カウンセラーとしての体験 こころの健康, 11, 18-23 .
- 半田一郎 2000 a 守谷町立愛宕中学校での活動を振り返って 守谷町立愛宕中学校(編) 文部省指定スクールカウンセラー活用調査研究委託事業実践報告書(第2年次) 19-22 .
- 半田一郎 2000 b 学校における開かれたグループによる援助 - 自由来室活動による子どもへの直接的援助 - カウンセリング研究, 33, 265-275 .
- 半田一郎 2001 「自由来室活動」を通して学校生活に根ざした援助を目指す 諸富祥彦(編著) カウンセリング・テクニクを生かした新しい生徒指導のコツ 学習研究社 Pp.218-225 .
- 石隈利紀 1996 日本の学校教育におけるスクールカウンセラーの現状と課題 - 学校心理学の視点からスクールカウンセラーの事例を検討する - こころの健康, 11, 36-48 .
- 石隈利紀 1999 学校心理学 - 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サ

ービス 誠信書房

木幡美奈子・庄司一子 1995 中学生の保健室および養護教諭に対するイメージと保健室利用に関する研究 教育相談研究, 33, 25-39 .

木南千枝 1998 “遊び部屋”から見えてくるもの 倉光修編 臨床心理士のスクールカウンセリング - 2 - その活動とネットワーク 誠信書房 Pp.94-102

近藤邦夫 1995 スクールカウンセラーと学校臨床心理学 村山正治・山本和郎(編) スクールカウンセラー - その理論と展望 - ミネルヴァ書房 Pp.12-26

櫻井信也・有田モト子 1994 SD法による学生相談センターに関するイメージの測定 学生相談研究, 15, 10-17 .

田島誠一 1998 スクールカウンセラーと中学生 こころの科学, 78, 67-74 . 日本評論社

Students' Evaluation for a School Counselor Holding an Open Group Approach

Ichiro HANDA & Naomi ARIGA

One hundred and ninety nine students responded the questionnaire. The evaluated SC opened their counseling room for students in the daily school life. Factor analysis about their image of SC indicated that there were three factors, "domestic image", "sociable image" and "silence image". The more often students talked with SC, the higher "domestic image", "sociable image" and the needs for SC are.

Key words: school counselor; junior high school; image; support needs; professional helper

(2001年1月9日受稿; 2002年7月16日受理)